

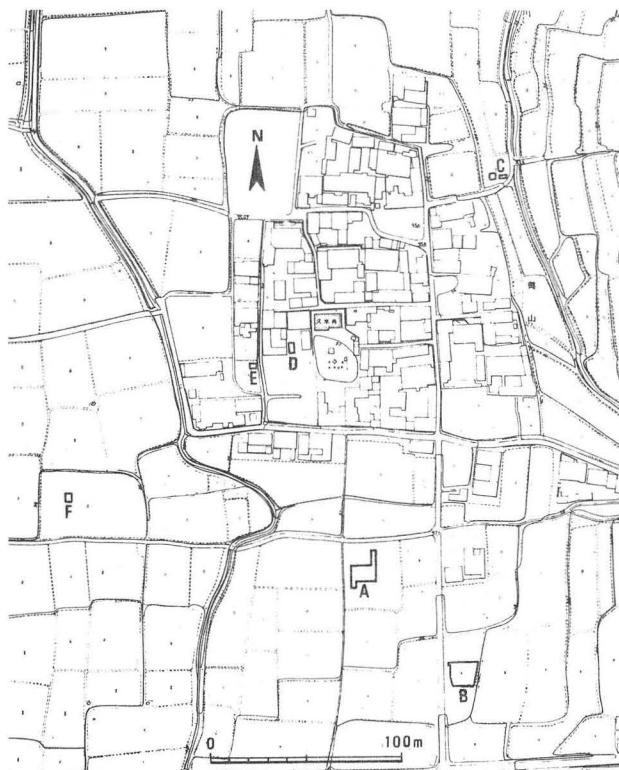
奥山久米寺の調査

奥山久米寺では、今年度、発掘調査地一覧表（P.2）に示した6地点で発掘調査を行なった。いずれも、家屋または納屋の新築に伴う事前調査である。このうちA地点では東西道路と奥山久米寺の寺域の南限と推定される掘立柱塀を検出した。B地点では素掘りの南北溝を検出し、奥山久米寺の寺域の東限を知る手がかりを得た。C地点では平安時代始めの井戸を検出した。この井戸からは緑釉陶器や墨書土器が出土している。他の3地点では顕著な遺構や遺物がないために、A・B・C地点の調査結果について述べる。

〔A地点の調査〕

（昭和52年4月～昭和52年5月）

調査地は現奥山久米寺の本堂の南約130m、県道桜井・檀原線の北100mの水田である。遺構は耕土と床土の下の暗褐色土層上面で検出した。暗褐色土層は厚さ



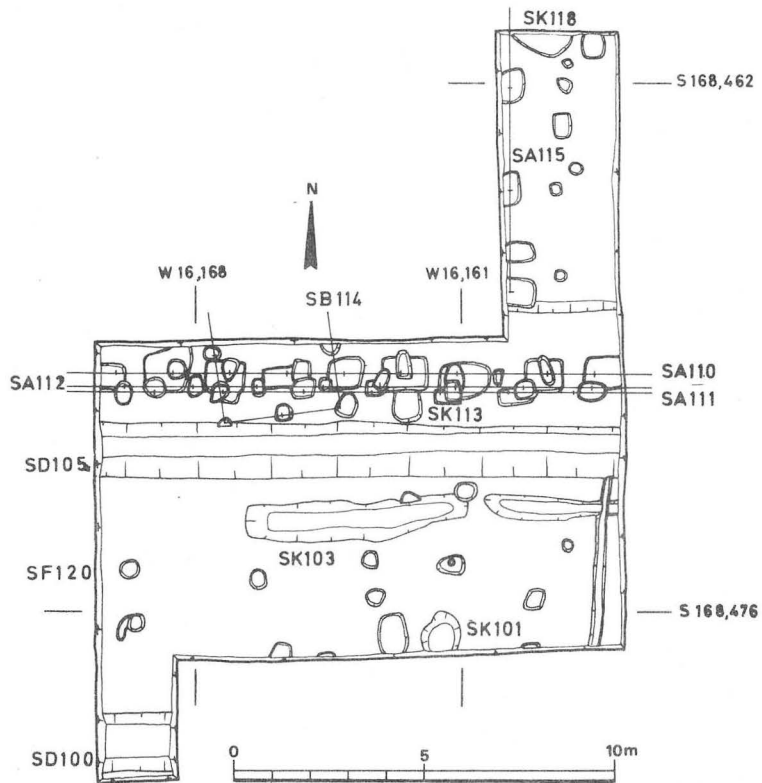
調査地点位置図（1/4000）

0.2～0.4mを測り、第Ⅲ様式土器を中心とした弥生時代の遺物包含層である。検出した主な遺構には道路1，溝2，掘立柱塀3，掘立柱建物1，土壇3がある。これらの遺構は重複関係，出土遺物からみて大きく3期に区分される。A・B期は7世紀中頃から8世紀初頭にかけて，C期は8世紀中頃を下限とする年代をあてることができる。

A期の遺構は掘立柱建物SB114と土壇SK101・113がある。SB114は梁行2間（3.1

m), 桁行2間(3.6 m)以上の南北棟で, その長軸は北で西に大きく振れている。SK113はB期の東西塀 SA110の柱穴と重複しており, SA110が新しい。堆積土から7世紀中頃の土器が出土した。

B期の遺構は東西道路SF120とその南北の側



A地点遺構実測図(1/200)

溝SD100・105, 掘立柱塀SA110・111・112・115, 土壌SK118があり, その方位は国土方眼方位とほぼ一致している。東西道路SF120の北側溝SD105は幅1.5 m, 深さ0.3~0.4 mの素掘りの溝で長さ14 mにわたって検出した。南側溝SD100も北側溝と同様に幅1.55 m, 深さ0.4 mの素掘りの溝で2 mほど検出した。この両側溝に挟まれたSF120の路面幅員は約6.2 m, 側溝間の心々距離は7.7 mを測る。

北側溝SD105の心から北へ1.5 m, 1.8 m, 2.1 mの位置で, 東西方向の掘立柱塀SA111, SA112, SA110をそれぞれ検出した。SA110は8間分(13 m)あり, 柱間は東から2間目が2.4 mで, ほかは1.5 mである。柱掘形は一辺1 m前後の大きさで, 北側に柱抜取穴のあるものが多い。SA111はSA110の柱穴に重複しその後で作られたもので, 5間分(9.3 m)を検出した。柱間は1.8 m前後である。SA112は3条の塀の中で最も新しいもので7間(12.3 m)分を検出した。

柱間は 1.5 ～ 2 m と不揃いであるが、1.8 m のものが多い。これらの 3 条の塀はその位置からみて建替えられながら道路の北を区画する施設とされたものであろう。

SA115 は SA110 の北 2.1 m にある南北で 2 間分 (5.4 m) を検出したが、建物の可能性も残る。土壌 SK118 は SA115 の北にあり、SA115 との新旧関係は不明である。堆積土から 7 世紀後半の土器が出土した。

C 期の遺構は土壌 SK103 がある。SF120 上に掘られた細長い土壌で、南北 1 m、東西 5.9 m、深さ 0.4 m を測る。堆積土から 8 世紀中頃の土器とともに円面硯が出土した。

以上 3 期の遺構を記したが、B 期の掘立柱塀 SA110・111・112 はその位置からみて奥山久米寺の南限を区画する塀と考えられ、少なくとも 2 回の建替えが行なわれている。SA110 と奥山久米寺塔心礎間の距離を測ると 108 m となる。この距離は奥山久米寺が南面する四天王寺式伽藍配置をもつものとすれば、やはり南限とみて良い数値であろう。その年代の上限は SA110 の柱穴や側溝 SD105 から出土した土器により 7 世紀中頃が考えられる。下限については明らかにする資料に乏しいが、SF120 に掘られた土壌 SK103 から 8 世紀中頃の土器が出土していることから、SF120 は 8 世紀中頃に道路としての機能を失った可能



A地点発掘区全景（南から）

性が強く、それに伴って寺域の南限を区画する塀も廃棄されたものであろう。

また SF120 は藤原京で検出されている小路と同じ幅

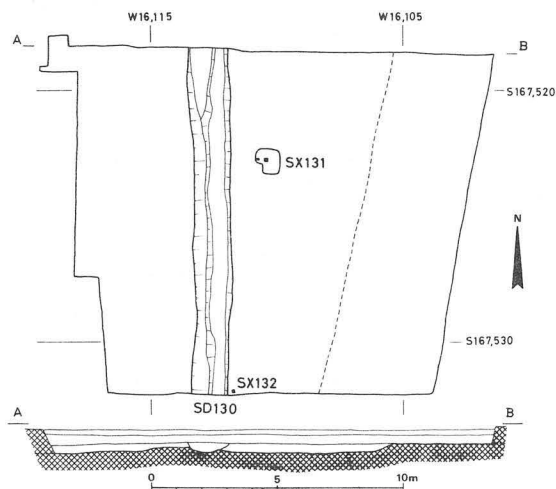
員をもっている。その位置は藤原京左京11条大路と左京12条条間小路を東に延長した場合、その中間点にあたる。SF120は藤原京の条坊施行よりも年代的に先行するので、今後、奥山久米寺の寺域を含めた飛鳥の地割と藤原京の条坊計画とがどう関係していたかが問題となるだろう。

〔B地点の調査〕

(昭和52年11月～昭和52年12月)

この調査は家屋新築に伴う事前調査である。調査地は奥山久米寺の南方170m、東寄りの水田である。調査の結果検出した遺構には南北溝1のほか掘立柱穴がある。

調査地の土層は、上から耕土(20cm)、床土(35cm)で、その下は東3分の1では直接青灰色粘土の地山となり、西3分の2は地山との間に褐色砂質土(30cm)の整地土となっている。



B地点遺構実測図(1/300)

南北溝SD130はこの整地土に掘りこまれており、幅1.5m、深さ40cmで、14mにわたって検出した。溝内には灰色砂や灰色砂質土が堆積しており、水の流れた形跡が明らかである。溝心の方位は方眼方位とほぼ一致する。調査区南端での溝心の座標は以下の通りである。

$$X = -167,532,0$$

$$Y = -16,112,7$$

整地土中には7世紀後半の土器が包含され、SD130堆積土には8世紀中頃の土器が含まれていた。整地土上面には各所に落ち込みがあり、焼土、炭化物に混って8世紀中頃の土器が出土した。SX131は発掘中央北よりで検出した掘立柱掘形で、2個重複し、いずれにも角柱の柱根を残すが、切り合い関係は明らかでない。SX132は発掘区南端で検出した角柱の柱根である。掘形は無く、整地に伴って据えたか、打ちこまれたものとみられる。SX131掘形には遺物が含

まれず、その年代は不明である。SX131・SX132ともに、SD130の東側に接して位置している共通点はあるもののその性格は、不明である。

SD130の性格については、①奥山久米寺、および②藤原京条坊、との関連が想定される。まず、奥山久米寺との関連では、SD130を北へ延長したラインは、奥山久米寺塔心礎位置から東へ65.6mの位置になる。この場所は、西面回廊(昭和47年度調査、『概報3』参照)を塔心礎に対して東へ折りかえした東面回廊推定位置よりさらに東へ33m外れたところである。しかし、奥山久米寺の伽藍配置が確実にない現状からは、回廊との関係はこれ以上追求できず、むしろ、ここでは従来手がかりの乏しかったこの寺の寺域東限に関連をもつ遺構である可能性を指摘するにとどめたい。また、この溝の開削年代は、7世紀後半を遡ることはあり得ず、7世紀前半の創建とみられる奥山久米寺との関連についてはなお問題が残されている。

つぎに、藤原京条坊との関連では、調査地は藤原京左京十一條四坊の東方にあたり、推定藤原京東京極(=中ツ道)から約240mである。SD130の年代とは近いが、この数値から京条坊地割りとの関連は、積極的には見出すまでに至っていない。

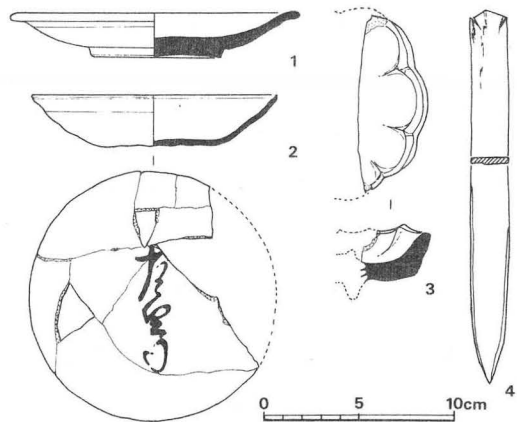
〔C地点の調査〕

(昭和52年11月～昭和52年12月)

この調査も家屋新築に伴う事前調査である。調査地は奥山久米寺東北方の低地にある水田である。調査の結果、井戸1基を検出した。

調査地区の土層は上から耕土(20cm)、茶褐色バラス(28～43cm)で、その下70cmは、青灰色砂と黒色粘土の互層となり、青灰色粗砂層へつづく。

井戸SE150の掘形は一辺約3mの不整形を呈し、深さ1.4mある。茶褐色バラス層から掘り込まれ、底面は青灰色粗砂層に達している。井戸枠は一辺1.36mの長方形板材に相



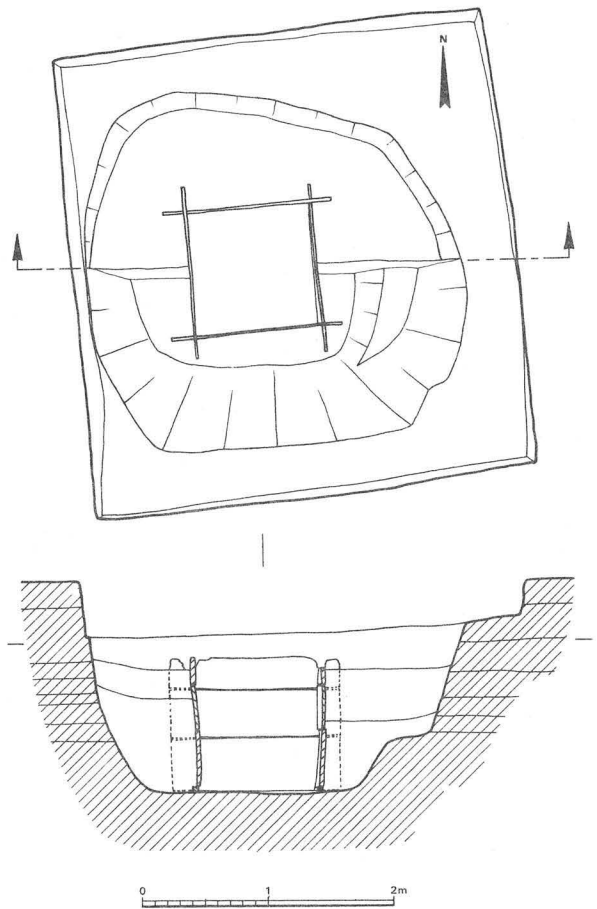
井戸SE150出土遺物(1/4)

欠きの仕口をつくり，井籠に組んだもので，内径は96cmあり，3段分を残す。東・西の最下段の枳板には下に角材をかませ，枳板の底面を同一にそろえている。

井戸内埋土は灰色粘質土で，その中から，緑釉皿（1），土師器杯（2），陶製宝珠硯（3）曲物容器，斎串（4）が出土した。これらの遺物は井戸廃絶にあたって投入された状況を示していた。その年代は土器からみると平安初期である。調査地内では井戸上屋は検出されなかった。

この井戸の性格については，近接する奥山久米寺との関連が考えられる。この井戸は塔跡の東80m，北100mに位置してい

る。奥山久米寺はなお寺域が未確認であるが，この井戸は出戸遺物からしても寺に付属するものとみられ，これは寺域がこのあたりまで及んでいることを示すかも知れない。B地点の南北溝SD130の北延長ラインに対しては東16mの位置になる。また，事実この井戸が奥山久米寺の付属施設であることが確かめられれば，この井戸の廃絶年代は，不明な点の多いこの寺の沿革について，新たな資料を与えることになると思われる。



井戸 SE150 実測図（1/60）